
Black.Life

雷撃ぶち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Black·Life

【Nコード】

N3527BA

【作者名】

雷撃ぶち

【あらすじ】

私はトラックに轢かれた。頭を強打し、薄れゆく意識の中で、何か大きな獣が吠えたような音が聞こえると、私の意識が闇の中へと消えていった。そんな時、私は目を覚ました。黒い鱗、大きな黒い翼を持った、ある国の歴史上人間と対立した『ブラックドラゴン』として。——そんな『ドラゴン』の私は、人を食ったり、騎士気取りのピクシーと出会って一緒に行動することになったり、頑張っ
て人間になりきったり、人間になった瞬間王子様に結婚の申し出が出たり、ドラゴンになった瞬間討伐隊に襲われたりしますが、私は

『ドラゴン』らしく、立派に生きていきたいと思います。

1. ご飯にケチをつけない。(前書き)

この小説には残酷な表現があります。苦手な方、無理な方は今すぐバックをお願いします。

1. ご飯にケチをつけない。

私は食っていた。果物、お肉、お魚を食べているのではない、私は『餌』を食っていた。それはもう美味。とろけるようなあの肉、そしてこの血に含まれた魔力と恐怖！この美味の8割くらいはこの魔力と恐怖だと思う。旨い。

私は逃げ惑いながら泣き叫ぶ『餌』を大量に口の中に入れると、それを一気に噛み砕いた。・・・マズイ、恐怖の味はするが魔力が全然ない。まあ有難く頂きましょう。

『餌』の味を堪能した後、ごっくん、と喉を鳴らし、誰もいなくなった森を見渡す。昔はこの『狩り』を嫌がったが、慣れたもんだな、と思う。私は口の周りについた血を舌で舐めあげた。

私はふと、昔を思い出した。

「ねえ、ドラゴンって興味ある？」

こいつは何を言っているのだろうか。

17という年になって、妄想の産物に興味があるのか。ガキんちよか、お前は。

私の目の前にいるこのツインテール女、相沢ほのかは私の親友であり、未だに子供っぽい趣味から抜け出せないという。ちなみに、こいつは異常にテンションが高いせいか、転んで脳しんとうを起こし病院送りにされ、足を捻じ曲げて骨を折ったことがある。つい最近だって骨を折ったらしい。

「・・・興味無いよ。アンタ、まだ妄想の産物になんて興味あんの？」

「いいじゃん、人が何かに興味を持とうと、勝手じゃーん！」

ほのかは頬を膨らませてふくれっ面になる。私は呆れ、この話題を変えようと何か別の話題を考える。

突然、視界が真っ白になった。紙……だろうか。どうやらほのかは紙を私の顔に押さえつけているらしい。

「ほら見てよ！これがドラゴンよ！」

ほのかに言われ、よく紙を見ると何か絵が描いてある。角、鱗、牙や爪、翼を生やした何かトカゲみたいなヤツ。口から炎を吐いている。結構上手く描いてある。多分、ほのかが描いたのだろう。ほのかは描いた絵は一回、30万で売れたそうだ。

「へ、へえ。それで？」

「んもう！反応薄いなあ！」

そう言って紙を放すと、ほのかは鼻を鳴らして先に行ってしまった。怒ったのだろうか。ドラゴンが描かれた紙が、私の足元に落ちている。

「なあに勝手に怒ってるんだよ……」

私はこんなことで怒るほのかにますます呆れ、紙を手にとって見る。こんなの現実だったら、絶対人とか食われるだろ……。

何だかドラゴンが存在しないことに、変な安心感がした。本当に良かっただろうなあ。今頃血の惨劇が世界中で起きてるって。

私は紙をスカートのポケットに適当にしまうと、さっさと歩き始めた。夕日が道路を、妖しくオレンジ色に染めていた。

自宅まで後数キロという所で、ある横断歩道に差し掛かった。信号が赤になるまで柵に寄りかかる私の前を、たくさん車が通り抜けていく。やがて赤信号が青に変わり、私はちよつと遅めに下を向いて横断歩道を歩き出した。

私は気づかなかったのだろう。この歩行者用信号機が昨日の大

雨で小さな故障を起こしかけて、青信号が赤に変わる時間が早くなっていたこと。私が横断歩道の途中まで来ていた所で、もう青から赤になっていたこと。そして、もう私の横に大型トラックが迫っていたこと。

ブー、というトラックの警笛に、私はやっと気づいた。が、もう遅かった。私は、派手に轢かれ、派手に飛んでいた。

視界の中の世界がぐるぐると回る。オレンジ色の空が下になり、上になったりと動く。そして私は、コンクリートに頭を強打した。

薄れゆく意識の中で、私のじんじんと痛む頭に何かが聞こえた。耳から入った音じゃない。頭の中で、聞いたことのない大きな獣が吠えたような音が聞こえると、まるでスイッチが切れたように私の意識は闇に消えた。

それ以降、何も覚えていない。

ぼんやりとしていた私は女性の叫び声で意識を現実に変えた。何事かと思いきや、白い頭巾を頭に巻き、古い服を着た老けた女性がこちらを指で指している。指で指すなど、失敬な。

「『ドラゴン』よ！誰か助けてー！！」

私はニンマリと笑うと、その女性をじいっと見つめた。魔力も豊富で、恐怖も十分。デザートととして、それはそれは最高級な食材が出て来たのだ。味わったことのない美味だと思うと、満腹だった腹が鳴る。

私は戸惑いなくその女性を食した。口に広がる味わったことのない美味が広がり、思わず目を細めてしまう。”デザート”をよく味わい、喉を鳴らし、胃に流した。げぶ、と満足して、私は言うのだった。

「ご馳走様と」

1. ご飯にケチをつけない。(後書き)

ドラゴンの主食は人間でした。(魔力・恐怖が好物)

2. こんな江戸っ子ピクシー見たことがない。

餌を食べ、寝床である山で私は野原の上に倒れこむ。眠いのだ。そういえばいきなりドラゴンになったもんだから、パニックになって寝てなかった。だけど、今じゃ普通に寝られるようになった。これは慣れている証拠。慣れてって怖いね。

何日か前、私は『ドラゴン』の姿でこの山に倒れていた。トラツクに跳ねられて死んだ筈なのに、私は生きてこのおかしな世界にいる。どうやら、私は転生して、元の世界ではなくこの世界に転送されたようだ。川で自分の顔や身体を見た時は凄く驚いたもんだ。顔が黒い鱗に覆われていて、目は深い青。大きな翼が生えていたのだから。それにしても、大型トラックに轢かれて転生なんて、なんという王道パターン。

記憶はあの事故から前は覚えていない。両親と姉妹である妹の顔はぼんやりと分かるくらいで、名前や、自分の名前さえぼんやりとしか覚えていない。いわゆる記憶喪失だった。ツライ。自分は人間であるが、どんな人間だったのか、名前すら分からずにいるのだ。つまり、私は無名である。

さらに自分でドラゴンとしての生活を作ったところ、それに自分が驚いた。山奥で起きて、近くの集落を襲って美味しい人間を食って、帰って寝る。食事となると、人間を食料として食べるのだ。果物とか他にあるのだらうに、人間だけ食べたいのだ。果物を見ても何も湧かないのだ。さっぱりしてそうな林檎を見ても、甘い桃を見ても。しかも、普通の人間を食べばいい筈なのに魔力やら恐怖を味わっている人間が好んでしまうのだ。ちなみに魔力は集落を襲う前に村人から聞いた。魔力を持っているほど、強力な魔法やら使えるらしい。最初は戸惑っていたものの、今じゃ戸惑いなくパクってしまおう。美味しいし、生きたいしね。

夜になると、東の方角に、ある所だけオレンジ色に光って明るい。どうやら町があるらしいが、今この姿で町にいったら・・・町は地獄絵図と化すだろう。集落の私の反応を見て、ドラゴン嫌われているらしいし。

人間になりたい・・・人間になって、あの町へ遊びに行きたい。はかない願いを持って漆黒の夜空に輝く月を眺めていると、次第に瞼が重くなってきた。月から溢れる黄金の光が、まるで「寝ろ」とでも言うように、私を優しく照らしてくる。私はそんな優しいお月様の下で、私は黒い翼を毛布みたいに身体に巻き、私は夢の海に溺れることになった。

『おい、てめえ』

何だよお

鱗が覆った身体に、何か振動が走る。ペしペしペし。叩かれてるようだけど、痛くないはない。だが、それは異常にしつこい。

何だか起こされているようだ。心地よく、ぐっすりと寝ているところを起こされるのは非常に気持ち良くない。寧ろウザい。

寝返りをうって、ちよつと唸る。

「・・・ほつといて・・・よお」

『あん？もう朝だぞ、まだ寝ているのかよオ！まあ、オイラが目エ覚まさしてやるよ！』

シャキン、という金属が何かに触れた音がすると、その瞬間腕に激痛が走った。私は絶えられず悲鳴をあげる。何かに切られたようで、ズキズキと痛む。

「痛ッ！」

『おお？さすがのドラゴン様でもオイラの剣には勝てねえかア！』

私はそのそと起き上がり、寝ぼけ眼で腕を見る。血は出ていない、鱗にちよつと傷が付いたくらいだった。ちえ、対した怪我でもないのに起きてしまったな。起こされたイライラと怒りを持ち、声

の主を見つけようと顔をあげる。

え？

私の視界には、何か蛍のような青い光が飛んでいるだけ。人間とか、他の動物は周りにはいない。まさか、心霊だと？

『心霊にすんなア！！』

怒声が響き渡ると、目の前にいた青い光が赤い光になった。珍しい蛍もいるものだ。

『虫すんなっつの！オイラは勇敢なる妖精騎士ピクシー、アマサ様だア！』

その蛍の光をじっと見つめると、やがてはつきりと形が見えてきた。とっても小さい。こいつが言うにはピクシーというらしく、姿はまだ幼い男の子で、騎士が着るみたいな鎧を着込んで、腰に剣を装着している。髪は金髪。

って、ピクシーって主に女じゃなかったっけ。

『そんなツラ下げて、ここで何やってんだイ。この辺りはオイラの縄張りだア、のこのこ入ってくるとはいい度胸してんじゃねえかい！』

と言って、剣を抜き取り私の鼻先に向ける。それにしてもこの剣小さいな。こんな剣で私を倒そうとするのか、愚か者め。

私は剣をアマサの手から取り上げ、その剣を口に入れた。もごもごと言いながら、いつしか集落を襲った時に目にしたあれを思い出した。襲いかかった私を撃退しようと、魔術師が刃物を魔法で巨大化させていた所を。

私にだってできるはず。多分。ドラゴンは万能、ドラゴンは最強。やってみせるさ。

『ちょッ・・・てんめえオイラの剣返せェ！！』

アマサが剣を取り返そうと口に猛烈アタックをしてくる。ほう、それは私に対しての猛烈なキッスと変換させてもらうよ。

暫く剣をもごごしている、何か剣が蠢き始めた。そして、剣はほとんど口の中で大きくなっていく。アマサが持てるぐらいになったと思う大きさまでなった瞬間に、剣をぷつ、と吐き出した。よだれ塗れになった剣は、元の大きさよりも少し大きくなっていた。けれども、アマサでも持てる大きさだ。

アマサがじいっと、大きくなった剣を見る。

『お前・・・「ブラックドラゴン」かア?』

ブラックドラゴン、という言葉にさあと首を傾げるが、アマサはそれでもキラキラとした目で私を見てから首に抱きついてきた。

「ちょ、何を!?!」

『すんげェ! オイラあの”人間と対立した伝説ドラゴン”と会っちゃった! この黒い鱗に魔法を使えるとならば、こいつア本物だア!』

「人間と対立した、レジェンドドラゴン・・・?」

私の疑問の声に、アマサは顔を上げてはあ?と言う。

『自分のことも知らねェのか? お前はマラス地方に伝わる歴史上で、世界中に疫病を蔓延させ、人間と対立した”悪の”伝説のドラゴン、「ブラックドラゴン」だぞ。ブラックドラゴンは、魔法も一流で人間は手を焼いたそうだが、ある英雄に殺されちゃったようなんだア』

私が。

——”悪の”伝説のドラゴン・・・?

2. こんな江戸っ子ピクシー見たことがない。

(後書き)

悪^{ワル}でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3527ba/>

Black.Life

2012年1月10日05時48分発行